

73 (この地の人間は)人の殺生を自らの手で気軽に行い
74 群盗も落ち着き払って我がもの顔に肩を並べて歩いている。
75 京から下った官僚は中央の権勢をちらつかせながら地方の豪族を釣り上げているし
76 都での牛車生活を舟に乗る生活に換えてしまい、(『楚辞』の漁父が言うように)皆 濁り水にどっぷり浸かっている有様である。

77 (商人たちは)米の商売を始めて、あくどく儲け、
78 また、にせものなのに良質の筑紫綿(絹)と偽って、官の綿として献上する。

79 この地では、塩魚を売る店は大変な臭気を発しているし

80 調子の狂った琴は糸を張り替える必要があるのに、この地ではそれが未だなされていらない。

以上の十句、この土地の慣わしがまだ改変するに至らず、野蠻の地であることを悲しみ傷んだ句である。

【九段】

81 誰かと共に(荒れ果てたこの地で)語り合えたらどんなに心が慰められることか。

82 (そんな話相手もないので)一人さびしく肘を枕にして眠る。

83 毎日、降り続く長雨の梅雨は蒸し蒸ししてうつつうつしい。

84 (官舎は雨漏りもひどく)朝ごはんを炊くこともできないで、炊事の煙も絶えてしまっている。

85 (長い間、ご飯が炊けないので)かまどや釜の中に水がたまって、ぼうふらなどが泳いでいる。

86 蛙たちが、きざはし(階段)の敷き瓦のところ、まるでまじないの呪文をとなえるかのようにやかましく

鳴いている。